

## 第459空輸中隊のパイロット、語学力で演習に参加 459th AS pilot exchanges aircraft for words

August 13, 2021

By Senior Airman Briana E. Bolfing  
374th Airlift Wing Public Affairs

モロッコのタフラウトでバスを降りた彼女は、猛烈な暑さに圧倒された。これは想像以上に大変だと思った。

炎天下に佇む野戦病院に向かって歩きながら、ここは彼女がこれまでいた、風がいくらか猛烈な暑さを和らげてくれる海岸沿いの街とは違うと感じた。

第459空輸中隊UH-1Nヒューイのパイロットであり訓練責任者のジェニー・セイバート大尉は、この暑さに負けず、コミュニケーションを通じて派兵中のアメリカ人とモロッコ人の橋渡しをする目的を果たした。

アラビア語が堪能なセイバート大尉は、ユタ空軍州兵の第151医療群を支援することを任せられ、唯一の女性アラビア語通訳者として米・モロッコ合同軍事演習「アフリカン・ライオン2021」に参加した。

セイバート大尉は、「私は主に婦人科テントで働いていたが、現地の人々と信頼関係を築くために必要とする場所に動き回っていた」「特に北アフリカや中東のような地域では、男性の通訳者を置かないことが重要だった。私はアメリカとモロッコの医療従事者と患者との間を通訳して支援した」と話した。

「アフリカン・ライオン」は、アフリカ大陸全体で毎年実施される米軍の演習の中でも最大級の規模を誇る。この演習は、参加国間の相互運用性を強化することを目的としたあらゆる任務能力を展開する、多領域・多国籍の訓練である。

複数の参加国のうち、一部の国はオブザーバーとして参加する。作戦の舞台は、主要言語がアラビア語のモロッコ、チュニジア、セネガルだ。

モロッコは近年、男女平等が進んでいるものの、未だに男性優位の文化が根づいている。

「男性通訳者は数人いて、必要時には予備の人員がいた。しかし、私をバックアップやサポートしてくれる人はおらず、自分がやらなければ誰かやる、という気持ちになった」とセイバート大尉は話す。

「関係を強化し、構築するという精神こそが大切だった。自分たちは全てにおいて文化的な配慮を守らなければならなかった。プレッシャーは確かにあったが、なぜそれが重要で必要なかが分かった」と続けた。

そのストレスはあったものの、この同演習はこれからの人生に残る良い思い出をもたらしてくれた、とセイバート大尉は言う。彼女は印象的な出来事を思い出して、目を誇らしく輝かせた。

セイバート大尉は、「全身の痛みを訴えてきた19歳の女の子がいて、診察のあいだ最初から最後まで通訳をした。スラングや方言こそ難しいが、少女は完璧に教科書通りのアラビア語を話していたので理解しやすかった。なので、私はその女の子と医師のやりとりを一部始終サポートすることができた」と振り返った。

彼女の尽力により、その若い患者に適切な治療を施すことができた。その女の子が必要な治療を受けられたことを知ると、苦勞が報われた気がした。



モロッコの人々を支援することになったセイバート大尉の道のりは、大学でロシア語を専攻したことから始まった。彼女はラテン語とスペイン語を理解し、現在は日本語を学んでいる。その中でも、アラビア語への興味が、彼女のキャリアを導き続けている。

「高校の遠足に行った時に、アラビア語が好きになった。遠足で行ったモスクの入り口の上にアラビア語が書いてあったのがとてもゴージャスで、私の心をつかんで離さなかった」とセイバート大尉は話す。

大学の時、ロシア語とアラビア語を4年間勉強して、競争率の高い「言語対応空兵プログラム」に応募した。このプログラムでは、空軍全体で実用レベルの外国語能力を持ち、異文化に対応できる軍人を育成する。彼女はこのプログラムの支援を受けて成長を続けている。

「空軍に役立つ言語を選ぶことで、将来、空軍の助けになることができると思った。アフリカン・ライオン作戦のような演習で使えるようにとプログラムは私のスキルアップをサポートしてくれた」とセイバート大尉は振り返った。

アフリカン・ライオン作戦では、7,000人以上が参加し、米軍とパートナー国軍の準備態勢を強化することに重点が置かれたが、セイバート大尉は言語を使って信頼を築くことに努めた。その信頼こそ、永続的な関係と思い出を築いたであろう。